子夫人と相携えてわたくしどもの愚かしい繰言をほほえみながら聞いていらつしやることであろう。

先生のご冥福を切にお祈り申しあげる次第である。三八・一一・一五（昭和三三年七月大学院修了、相愛女子短大講師）

宮嶋　弘先生をしのぶ

堺　光一

宮嶋弘先生を、私が見受けたのは、余程古い前であるが、意識したのは昭和十四五年頃ではないだろうか。

よく東山松原の銭湯で先生にあつた。

夕方のきまつた時間に、きまつた風呂道具を片手にもつて、頭髪を長くして、多分そうだと思うが結城紬の着物を黒のへこ帯でまいた小柄の先生が風呂屋にきた。

そして道であう先生は一向世間のことには無関心なような恰好で平下駄でいそがしくゆかれたものだ。

私は先生のお仕事が何であるかも知らないので先生に一寸奇妙な感じをもつていたが、しかしそれでも、目が合うと、軽い挨拶をして下さつた。

ところが昭和十九年頃急に先生のお姿が拝見出来なくなつた。当時世の中は決戦時代であり、戦の最中であつた。

それから終戦をむかえ、外国軍隊が進駐してきて、世の中は混乱状態をむかえた。私も軍隊から復員して、欠乏の生活にはいつた。毎日何の方針も立たないように街へさまよい出ていた。

そして偶然先生に、京都駅丸物の前の靴みがき屋でおあいした。

「やあ」

といわれて、

「世の中がかわりました。何事も外国から指導してもらはねばなりません」

とおつしやつた先生の言葉が、今でもはつきり私の耳に残つている。先生は多分靴の裏金を打たれていたのだ。

それから三度目に逢つたのは立命館大学であり、さらに私が大学院にはいるにおよんで先生は国語学の教授として毎時間、ほとんど個人指導のような形で「言語構造論」を私に大学院の講義をして下ださつた。

その間、いろいろ授業中に、自己の感懐をよくもらされた。自分は中京錦の室町の医者の息子で、理科をやりたかつたのであるが、製図を書くのがいやさに文科に這入つてしまつたこと、学問はお面白くやらないけないとか、易のことか、その他身上のことなど話されて、私もいつしか先生の内面を知るようになり、先生に親近感をいだいた。

その後、病を得られた先生から、私の著書が出版されたことについて祝のはがきを頂き、さつそく著書をもつて桂の先生宅へ向うた。その日は雪のふる寒い日で、その上先生宅が中々見つからず難儀して宅へつくと先生は大変やせた顔を床からのぞかせて、ゑ顔でむかえて下ださり、持参した著書とリンゴを心よく受取つて下された。今はその出遇いが最後となつた。昭和三十五年一月四日のことであると思う。

もし、先生が病に犯されることなくば、ゆきとどいた、しかも、細かい先生の研究は業績として大を成すものがあつたことであろう。大変おしい気持がしてやまない。

（昭和三〇年七月大学院修了、洛南高校教諭）